

厚生労働科学研究費補助金（がん対策推進総合研究事業）

（総括研究報告書）

がん相談支援の質の確保及び持続可能な体制の構築に資する研究

研究代表者 高山 智子 静岡社会健康医学大学院大学社会健康医学研究科

## 研究要旨

**【目的】**本研究では、1) がん専門相談員の研修目標達成度評価の導入および個々の相談支援者の相談対応力向上に向けた育成方策を検討し、2) 拠点病院内のスタッフ間の連携と役割分担に基づく持続可能な相談支援モデルの検討と実装可能性の検証を行うことを通じて、がん相談支援センターの質の確保と持続可能な相談支援体制の構築に向けた提言を行うことを目的とした。

**【方法】**研究初年度の2023年度は、1. 相談員の研修目標達成度評価の導入と実施可能性の検証：(1) 初期研修受講後の到達アウトカム評価、(2) 相談員研修提供ネットワークの構築、2. 相談/対応内容の可視化と継続教育への教育還元方法の検討：(1) 相談員の持続的な質の保証、(2) 相談員の研修における学習評価資料作成、(3) 相談員に求められる学習機会、(4) テキストマイニングツールとLLM（大規模言語モデル）を用いた相談支援内容の解析と相談支援センターのフィードバックを得る方法、(5) 生成AIの活用可能性、3. 拠点病院内の持続可能な相談対応モデルの検討と実装可能性の検証：(1) 大学病院、(2) 総合病院、(3) がん専門病院での体制に関する検討を実施した。

**【結果・考察】**目的1) について、初期研修のアウトカム評価は概ね研修目標で狙った学習効果を測定できることが確認できた。また相談研修提供ネットワークで実施した研修と従来から実施の研修の同質性について確認された。継続教育については、継続的な学習機会への参加や新たな課題や環境に適応させた相談支援センターを支えるツールをどう使い環境整備につなげていくかが重要であることが示された。目的2) では、施設種別の異なる施設および地域での検討を既存の枠組に沿って開始した。相談支援センターの周知や体制整備については、継続的に院内や地域に働きかけて評価していくことの重要性が示された。

**【結論】**今回行った初期研修のアウトカム評価をさらに適切に評価できるよう修正・検討を重ねることで持続可能ながん相談の研修体制への足がかりにできると考えられた。また「学習評価資料」の評価・検証を進めることで、個々の相談員の学習目標を確認することができると考えられた。相談支援センターの周知や体制整備は、個々の施設背景によりやりやすさが異なることから、継続性のみならず対応方法や方策にも工夫が求められる。今後も好事例とその背景の検討・考察を深めていくことで、現場に還元できる相談対応モデルを提示していく予定である。

## A. 研究目的

がん診療連携拠点病院（以下、がん拠点病

院）に設置されるがん相談支援センター（以下、相談支援センター）は、がん患者や家族のみならず、がん医療の質の向上にも欠かせない

存在となっている。その相談支援センターの質をいかに確保し、かつ、持続可能な体制を構築するかは喫緊の課題である。がん専門相談員（以下、相談員）育成は、現在、講義および演習からなる初期研修が国立がん研究センターにより提供され、多忙な臨床現場の実情を考慮して、受講しやすい形式で受講できる形式のオンライン教育プログラムの作成・提供手法の検討が先行研究班（厚労科研 20EA1015）で開発され、実研修への導入が行われてきた。しかし、とくに現場を抱えながら継続教育を担う都道府県拠点病院の相談員の負担は大きく、教育内容の量的・質的な地域間差も生じている状況がある。現場の課題を可視化するとともに、現場の継続教育を支援できる体制も含めた検討が必要である。

さらに、多様化・複雑化する相談ニーズに適切に対応できるようにするには、個々の相談員のみならず、相談支援センターの機能を最大限に発揮できるシステムとしての相談対応力の向上が求められる。そのためには、第一次相談対応や専門性の高い相談対応の連携先としての他の医療スタッフの存在が必要である。

本研究では、1) がん専門相談員の研修目標達成度評価の導入および個々の相談支援者の相談対応力向上に向けた育成方策を検討し、実施可能性の検証を行うこと、2) 拠点病院内のスタッフ間の連携と役割分担に基づく持続可能な相談支援モデルを検討し、実装可能性の検証を行うことを通じて、がん相談支援センターの質の確保と持続可能な相談支援体制の構築に向けた提言を行うことを目的とする。

研究開始1年目である2023年度は、目的1) 相談員の研修目標達成度評価の導入と個々の相談支援者の育成方策・実施可能性の検証について、1. 相談員の研修目標達成度評価の導

入と個々の相談支援者の育成方策・実施可能性の検証：(1) 初期研修受講後の到達アウトカム評価、(2) がん専門相談員研修提供ネットワークの構築～がん相談支援センター外にも、がん相談スキルをもった医療職者を増やしていくための研修提供プログラム～、2. 相談/対応内容の可視化と継続教育への教育還元方法の検討：(1) がん診療連携拠点病院の相談支援業務の整備指針の対応状況と院内外の支援に関する研究、(2) がん専門相談員の研修における学習評価資料作成に関する研究、(3) がん専門相談員のための「これからのIT技術革新に備える」ワークショップの開催と相談員に求められる学習機会、(4) テキストマイニングツールとLLM（大規模言語モデル）を用いた相談支援内容の解析と相談支援センターのフィードバックを得る方法の検討、(5) 生成AIの活用可能性に関する研究、目的2) 拠点病院内の持続可能な相談対応モデルの検討と実装可能性の検証について、3. 拠点病院内の持続可能な相談対応モデルの検討と実装可能性の検証：(1) 大学病院におけるがん相談支援センターの周知度向上への継続した取り組みに関する研究、(2) 総合病院における持続可能な相談対応方法や体制に関する研究、(3) がん専門病院としての持続可能な相談対応方法や体制に関わる検討を実施した。

## B. 研究方法

### 目的1. 相談員の研修目標達成度評価の導入と個々の相談支援者の育成方策・実施可能性の検証

#### 1) 初期研修受講後の到達アウトカム評価

がん相談に関する初期研修と位置付けられる基礎研修は、講義型研修の基礎研修(1)(2)と、演習型研修の基礎研修(3)である。本検討では、基礎研修(3)のプログラムで実施された研修の質を測定するアウトカム評価指標について、「I.

事前・事後知識確認テスト」および「Ⅱ. 研修前・研修後の業務意識アンケート」により到達アウトカム測定により検討した。

## 2) がん専門相談員研修提供ネットワークの構築～がん相談支援センター外にも、がん相談スキルをもった医療職者を増やしていくための研修提供プログラム～

がん相談対応に必要なスキルを学ぶ研修ニーズの増大に対して、国立がん研究センター（以下、National Cancer Center Japan : NCC）単独での研修提供のみでは対応しきれないため、NCCの他、関係機関である日本がん相談研究会、日本がん看護学会、日本医療ソーシャルワーカー協会、パブリックヘルスリサーチセンターを含む5団体が協働して相談員研修提供ネットワークの構築に向けたプロジェクトを始動した「2022年度 がん医療の基盤整備に対する助成プロジェクト；日本癌治療学会/ファイザー、がん専門相談員研修提供ネットワークの構築（研究代表者：八巻知香子）」。

このプロジェクトの一環として、持続可能な初期研修の提供体制を構築すべく受講ニーズの高いNCC基礎3に準じた初期研修（以下、Cancer Counseling Training Network Program : CCTNP 基礎3）が試験的に開催された。本研究班の検討では、このプロジェクトで実施されたCCTNP研修について、客観的に評価することを目的とした。

従来のNCC基礎3とCCTNP基礎3は受講者である相談員にとって同等の学びを得る機会となり得るか、両研修の同質性について検討するために、NCC/CCTNP基礎3それぞれのグループで作成された作業シートの内容をデータとし、①受講者特性、②相談支援のプロセスと事例の視点や具体例の記録の有無、③演習事例における重点的に取り組むべき問題と相談対応の目標と支援に関する内容の有無について、その内容を

定性的に評価・検討を行った。

## 2. 相談/対応内容の可視化と継続教育への教育還元方法の検討

### 1) がん診療連携拠点病院の相談支援業務の整備指針の対応状況と院内外の支援に関する研究

相談員向け研修の受講登録者を対象に、2023年3～4月に匿名自記式のWeb調査の協力依頼を行い、相談員が相談対応力を維持・向上するために既存の研修や学会等への参加が有効であるかを検証し、今後の教育支援環境のあり方を検討した。調査内容には、相談員基礎研修の学習目標にも挙げられ、かつ、意識して対応することが重要と考えられる1) 心理的サポート、2) コミュニケーションスキル、3) 情報収集、4) 課題の共有、5) 科学的根拠およびヘルスリテラシーに基づく情報支援の対応の5領域16項目の設問を用意し、意識して相談対応しているかを尋ねた。背景要因として、属性や相談対応経験の他、基礎研修他の研修受講・対応経験や学会参加状況との関連を検討した。

### 2) がん専門相談員の研修における学習評価資料作成に関する研究

がん専門相談員を対象とした研修受講者がより客観的に学習の評価する基礎研修(3)に関するルーブリックを作成することを目的として、基礎研修(3)に関する「受講生資料」「ファシリテーターマニュアル」「講義用スライド」およびルーブリックに関する文献資料をもとに、がん相談の経験が豊富な関係職種によるディスカッションを行い、質的記述的に内容を検討した。

### 3) がん専門相談員のための「これからのIT技術革新に備える」ワークショップの開催と相談員に求められる学習機会

日々更新され変化する臨床現場の相談員がどのような学習機会を求めているのかについて、

がん専門相談員向けに「これからの IT 技術革新を考えるワークショップ」を行い、受講者のアンケート結果から検討を行った。

#### 4) テキストマイニングツールと LLM（大規模言語モデル）を用いた相談支援内容の解析と相談支援センターのフィードバックを得る方法の検討

多くのがん相談支援センターでは、現在蓄積されたデータの活用や相談員間の知識共有は十分に出来ていない。先行研究班（厚労科研 20EA1015）で開発したテキストマイニングを用いた相談支援内容の解析ツールを用い、診療科ごとに生じやすい相談/対応内容の可視化と課題の分析を行った。また LLM（大規模言語モデル）の生成 AI 機能をツールに組み込み、がん相談支援業務の負担軽減の可能性の検討、相談支援センターの利用者からフィードバックを得る方法について課題を洗い出した上で実現可能な方策を検討した。

#### 5) 生成 AI の活用可能性に関する研究

がん相談支援において人手不足の解消策の一つとして人工知能の活用による効率の向上が考えられる。発展が目覚ましい大規模言語モデルを活用した生成 AI によるがん相談支援が可能であれば、負担軽減に役に立つと考えられる。そこで、代表的な生成 AI である ChatGPT を使って、がん相談支援に関する基本的な事実に関する質問、その他の事実に関する問題、また、計算問題の質問を試験的に質問してみて、その回答の傾向を観察した。

### 3. 拠点病院内の持続可能な相談対応モデルの検討と実装可能性の検証

本検討では、地域や特性の異なる複数の拠点病院で、拠点病院のシステムとしての相談対応モデルの検討を行うために、病院特性の異なる拠点病院の院内の相談支援センターの周知、活

用と院内および地域での役割分担等の相談支援体制の特徴と課題の可視化を目的として分担・協力者間で活動内容の意見交換を実施した。各拠点病院での検討は、相談支援の現場に過度な負担がかからないよう、すでに院内や地域で行われている活動と連動して行うこととした。

#### 1) 大学病院におけるがん相談支援センターの周知度向上への継続した取り組みに関する研究

本検討を実施した大学病院では、院内のがん相談支援センターの経年的な周知度調査の結果から、周知度を向上させる方策の検討を行った。

#### 2) 総合病院における持続可能な相談対応方法や体制に関する研究

がんのみに特化した対応が難しい総合病院において、がん相談支援センターの質を担保しつつ、持続可能な支援体制について、院内の実務者会議に図りながら検討を開始した。

#### 3) がん専門病院としての持続可能な相談対応方法や体制に関わる検討

都道府県拠点病院でもあるがん専門病院においては、持続可能な相談対応方法や体制について、院内および地域での連携、社会的人的リソースとの連携のあり方について検討を行った。地域での連携については、九州・沖縄ブロックの相談員とともに地域における相談支援体制の質の向上を検討した。また県内のがんナビゲーターと相談員との連絡を取ることで人材リソースの活用状況と対策を検討した。

（倫理面への配慮）

本研究は、患者のヘルシンキ宣言（世界医師会）の精神と『人を対象とする医学系研究に関する倫理指針』（文部科学省・厚生労働省）に従い実施した。

## C. 研究結果

### 目的 1. 相談員の研修目標達成度評価の導入と個々の相談支援者の育成方策・実施可能性の検証

#### 1) 初期研修受講後の到達アウトカム評価

「Ⅰ. 事前・事後知識確認テスト」および「Ⅱ. 研修前・研修後の業務意識アンケート」により到達アウトカムを測定し検討したところ、「Ⅰ. 事前・事後知識確認テスト」では、事前事後で有意な差がみられたのは、事例検討型の設問のうちの 2 項目に限られたが、それらはいずれも、事後に正答率が上がる傾向にあった。有意差のない項目の中には正答率が下がった項目も見られた。また、「Ⅱ. 研修前・研修後の業務意識アンケート」では、多くの項目で有意な差が見られ、個々の観点がより意識されるようになる傾向にあった。

#### 2) がん専門相談員研修提供ネットワークの構築～がん相談支援センター外にも、がん相談スキルをもった医療職者を増やしていくための研修提供プログラム～

CCTNP 基礎 3 の受講者数は 22 名で、CCTNP 基礎 3 より選定した 2 グループ/12 名と NCC 基礎 3 の 2 グループ/14 名（計 26 名）のワークシートを定性的に分析した。両属性に有意な差は認められなかった。また、a. 相談支援のプロセスに基づく分類、b. 事例の視点や具体例に基づく分類、c. <事例 1 の重要点>の確認から、それぞれの研修の出現内容を検討したところ、NCC/CCTNP 基礎 3 の各グループの作業シートへの記載内容は概ね一致していた。

### 2. 相談/対応内容の可視化と継続教育への教育還元方法の検討

#### 1) がん診療連携拠点病院の相談支援業務の整備指針の対応状況と院内外の支援に関する研究

相談支援活動の現任者 409 名の分析の結果、

相談対応時に重要であると考えられる全 16 項目の意識状況の得点は、 $14.3 \pm 1.9$  (range:0-16) で、各領域の得点は高かった順に、情報収集、心理的サポート、コミュニケーション、情報共有、情報支援であった。またこの得点は、月あたりの相談対応件数、都道府県で開催の研修参加、1 年以内の学会参加と有意な関連が見られ、それぞれ多い程、意識して相談対応しているという結果であった。

#### 2) がん専門相談員の研修における学習評価資料作成に関する研究

がん専門相談員に必要とされている<学習課題>については、「がん対策、がん診療における相談支援の役割」「相談方法・ツール（対面、電話、オンライン等）の違いと特徴を踏まえた対応」「想いの受け止め」「困りごとの本質の共有する」「患者・家族・医療者の関係の強化と改善」「信頼できる情報の見極めと情報支援」「相談者のその人らしい意思決定の支援」

「相談対応の質の担保と相談対応力の向上」「相談員のストレス・マネジメント」の 9 項目があげられた。これらの学習課題の達成の評価区分<評価尺度>、各学習課題に求める具体的なスキルやコンピテンシーの論点を端的に表現した<評価観点>を作成し、評価観点における評価尺度に応じた学習者の行動や態度、典型的なパフォーマンスの特徴を記述した<評価基準>を作成した。

#### 3) がん専門相談員のための「これからの IT 技術革新に備える」ワークショップの開催と相談員に求められる学習機会

「これからの IT 技術革新を考えるワークショップ」には 162 名が参加し、事後アンケートには 98 名から協力が得られた。相談支援の現場での IT 技術確認に伴う対応について、約 3/4 の者「心配がある」、「期待している」と回答し、期待と不安の両方があることが示され

た。また自由回答の意見からは、未知の分野であるために不安があることその他、相談員側の誹謗中傷等のリスクに関する懸念があることもうかがえた。

#### 4) テキストマイニングツールと LLM（大規模言語モデル）を用いた相談支援内容の解析と相談支援センターのフィードバックを得る方法の検討

10 件の相談記録情報サンプルデータを用いた LLM の生成 AI の結果、ファインチューニングの前後で生成される文章が明らかに異なり、追加学習の効果が確認できた。また東京都がん診療連携協議会第 37 回相談・情報部会担当者連絡会へのオブザーバ参加と青森県立中央病院、山形県立中央病院への訪問を通して、相談支援センターのフィードバック検討の為の情報収集を行なった。

#### 5) 生成 AI の活用可能性に関する研究

がん相談に関する基本的な質問について大規模言語モデルを活用した生成 AI を使用して回答の傾向を検討した結果、がん相談支援センターとは、設置場所、利用料金についての問いについて、ホームページからは間違いではないが、過度に一般化された回答が返される結果であった。また、人口の少ない都道府県を質問したり、計算を質問しても誤った回答が混じっていた。

### 3. 拠点病院内の持続可能な相談対応モデルの検討と実装可能性の検証

#### 1) 大学病院におけるがん相談支援センターの周知度向上への継続した取り組みに関する研究

大学病院で行われた経年的に実施している周知度調査の結果、相談支援センターの利用率は、前年度から微増し、周知経路についてはスタッフからの紹介が前年比より 8%増加した。

#### 2) 総合病院における持続可能な相談対応方法

#### や体制に関する研究

総合病院においては人材面で制約がかかりやすい状況があり個人への負担がかかりすぎないようなサポートが必要であること、病院医師幹部が関わることで直接問題解決につながること、相談者の多様なニーズを考慮すると、オンライン環境での相談対応はあった方がよいことなどが、課題や対応の方向性として浮かび上がった。

#### 3) がん専門病院としての持続可能な相談対応方法や体制に関わる検討

院内においては診療科運営会議において「がんと診断されて間もない情報提供資材（冊子）の内容や経緯の説明を行い、医師のみならず医師事務作業補助者からの配布、デジタルサイネージによる周知ビデオ、受診用クリアファイルによる情報掲載と周知を行った。

地域における体制については、2023 年度に 2 回行われた福岡県がん診療連携協議会情報提供・相談支援部会において情報共有して検討を行った。九州・沖縄ブロックで行われた地域相談支援フォーラムでは、各県の相談支援向上に向けた取り組みの紹介やがんナビゲーターとの交流会、相談員との連携と課題の議論を行った。終了後のアンケート結果では「がん専門相談員の役割について再確認することができた」

「相談支援の質の維持・向上に活かすことができる」の質問に対して、各々 99%、100%の参加者が“大変そう思う”または“そう思う”と回答していた。

### D. 考察

#### 目的 1. 相談員の研修目標達成度評価の導入と個々の相談支援者の育成方策・実施可能性の検証

##### 1) 初期研修受講後の到達アウトカム評価

「I. 事前・事後知識確認テスト」で、事後

に正答率が上がる傾向にあったこと、「Ⅱ. 研修前・研修後の業務意識アンケート」で、多くの項目で有意な差が見られ、個々の観点がより意識されるようになる傾向にあったことから、本研究で用いたテストと業務意識アンケートにより、本研修で狙った学習効果をアウトカムとして測定できたと考えられた。一方で、特に「Ⅰ. 事前・事後知識確認テスト」については、選択肢の設定が複雑すぎるために得点が下がった可能性が疑われる回答もあり、よりの確に到達アウトカムが評価できる設問形式にする工夫の余地があると考えられた。

## 2) がん専門相談員研修提供ネットワークの構築～がん相談支援センター外にも、がん相談スキルをもった医療職者を増やしていくための研修提供プログラム～

CCTNP 基礎3 と NCC 基礎3 の受講者の属性に有意な差は認められず、研修の同質性を評価する上での比較対象として問題ないものと判断された。NCC/CCTNP 基礎3 の各グループの作業シートへの記載内容は概ね一致しており、両研修の受講者共に基礎研修(3)の学習目標を達成したと評価できたと考えられた。このことから、今回試験的に開催した CCTNP 基礎3 は NCC 基礎3 と同等の研修と見なすことができると考えられた。

## 2. 相談/対応内容の可視化と継続教育への教育還元方法の検討

### 1) がん診療連携拠点病院の相談支援業務の整備指針の対応状況と院内外の支援に関する研究

相談支援活動の現任者を対象に実施した調査の結果から、各都道府県で行われている研修や学会への参加が、相談対応時の意識化に関連していることが示された。このようなすべである環境を活用し、組織として参加を促し支援して

いくことが、効果的な継続教育の提供につながると考えられた。一方で、相談対応に求められる知識やスキルは多様化しており、既存の場だけでカバーできない教育学習領域の対応もさらに検討することが重要である。

### 2) がん専門相談員の研修における学習評価資料作成に関する研究

アクティブラーニング形式の研修である基礎研修(3)に関する学習評価資料「ループブック」の作成を行った。がん専門相談員に求められる基本的な能力が段階的に示されており、研修後の評価に活用できると考える。今後は関連機関において試行し、実施可能性および効果的な活用方法について検討を行う必要がある。

### 3) がん専門相談員のための「これからの IT 技術革新に備える」ワークショップの開催と相談員に求められる学習機会

相談支援を取り巻く現状を相談員同士で共有する機会は重要であり、今回実施したワークショップのように、それが適時に行われること有用であると考えられた。このようなワークショップのような機会を相談員に対して設けていくこと、設けるためのしくみを考えていくことが必要であると考えられた。

### 4) テキストマイニングツールと LLM (大規模言語モデル) を用いた相談支援内容の解析と相談支援センターのフィードバックを得る方法の検討

10 件の相談記録情報サンプルデータを用いた LLM の生成 AI の結果、ファインチューニングによる追加学習の効果が確認できた。

相談支援に関するヒアリング・訪問による状況把握により、相談支援センターのフィードバック検討の為の情報収集における、現状の把握と幾つかの課題を明らかにすることができた。これをもとに次年度以降に具体的な検討を進めていく予定である。

## 5) 生成 AI の活用可能性に関する研究

生成 AI を使用して回答の傾向を検討した結果、間違いではないが、過度に一般化された回答が返されることから有用性には疑問が残った。また、人口の少ない都道府県を質問したり、計算を質問しても誤った回答が混じっていることから、利用には注意する必要があると考えられた。以上から、ChatGPT は、2024 年 2 月現在ではまだ質問に対する回答という使い方では有用性は限られると考えられ、別の活用法を探索する、あるいは今後の発展を待って使用することが望ましいと考えられた。

## 3. 拠点病院内の持続可能な相談対応モデルの検討と実装可能性の検証

### 1) 大学病院におけるがん相談支援センターの周知度向上への継続した取り組みに関する研究

相談支援センター利用者に対する周知度調査の結果から、院内スタッフや担当医からの紹介の増加が、相談支援センターの利用の向上につながったと考えられた。一方で、「何を相談したらよいかわからない」「入りづらい」といった利用者からの自由記載の声をも聞かれており、今後はさらに院内連携を図り医療従事者からの周知をしていく必要があると考えられた。

### 2) 総合病院における持続可能な相談対応方法や体制に関する研究

がん相談支援部門が必ずしも病院収入に直結しないため人的および物的資源投入については病院幹部がその意義を十分に理解する必要性や相談支援センターにおける医師との連携については医師の病院幹部が部門に関わることが相談員の心理的負担の軽減に重要であると考えられた。今後病院全体での PDCA サイクルが回せるようなシステム作りと運営の有効性について検証していく予定である。

### 3) がん専門病院としての持続可能な相談対応

## 方法や体制に関わる検討

院内での相談支援センターの周知活動については、現在、具体的な周知の効果（利用者数、利用の契機や相談内容等の変化）について分析を行っているところである。また、地域での相談支援の利用および質の向上については、県内の各拠点病院と連携と情報交換をはかり、がん診療連携協議会にて検討し経時的な変化を追っていく予定である。

九州・沖縄ブロックでの地域相談支援フォーラムの終了後のアンケート結果から、日常業務に追われがちながん専門相談員にとって、このような情報交換と議論の場が質向上にむけ重要であることが示唆された。またがんナビゲーターとの交流会において、積極的に推進されている事例ではその機能は十分に発揮されていることが示されたが、一方でがんナビゲーター制度の周知は、医療関係者においてすら未だ十分とは言えず、教育や拠点病院との連携等の様々な課題が明らかになった。

## E. 結論

目的 1) 相談員の研修目標達成度評価の導入と個々の相談支援者の育成方策・実施可能性の検証について、初期研修である基礎研修(3)のアウトカム評価については概ね研修目標で狙った学習効果を測定できることが確認できた。また相談研修提供ネットワークの構築により実施された CCTNP 基礎 3 と従来からの NCC 基礎 3 研修の同質性について確認され、今後修正・検討を重ねることで持続可能ながん相談の研修体制の足がかりにできると考えられた。また相談/対応内容の可視化と継続教育への還元方法の検討では、新たな課題や環境に適応させた相談支援センターを支えるツールや環境整備の重要性が浮かび上がった。また「学習評価資料」の評価・検証を進めることで、個々の相談員の学

習目標を確認することができると考えられた。目的 2) 拠点病院内の持続可能な相談対応モデルの検討と実装可能性の検証については、各拠点病院での検討は、すでに院内や地域で行われている活動と連動して検討を開始した。相談支援センターの周知や体制整備は、個々の施設背景によりやりやすさが異なる事から、継続性のみならず対応方法や方策にも工夫が求められる。今後も好事例とその背景の検討・考察を深めていくことで、現場に還元できる相談対応モデルを提示していくことが重要である。

## F. 健康危険情報

該当なし

## G. 研究発表

### 1. 論文発表

高山智子, 齋藤弓子, 奥野順子, 花出正美, 高橋朋子, 小郷祐子, 若尾文彦. がん専門相談員の診療ガイドラインの利用状況と利用に及ぼす背景要因の検討. 医療の質・安全学会誌 v18(4)399-413, 2023.

森田勝, 吉田稔, 調憲, 相羽恵介, 土岐祐一郎, がん医療ネットワークナビゲーターの活動の活性化と質の向上にむけて, 癌の臨床: 67-5. 213-218, 2023.

吉田稔, 森田勝, 平原順子, 佐々木治一郎, 猪俣雅史, 清家正博, 藤也寸志, 調憲, 相羽恵介, 土岐祐一郎. がん医療ネットワークナビゲーター活動の現状報告 - 2022 年活動実態調査とシニアナビゲーター更新調査票に基づく -. 癌の臨床: 67-5. 205-212, 2023.

### 2. 学会発表

八巻知香子. がん専門相談員研修提供ネットワークの構築 - がん相談支援センター外にも, がん相談スキルをもった医療職者を増やし

ていくための研修提供プログラム -. 第 61 回日本癌治療学会学術集会. 2023. 10. 19-21. (横浜)

高山智子, 齋藤弓子, 近藤まゆみ, 品田雄市, 清水奈緒美, 小郷祐子, 高橋朋子, 八巻知香子. がん診療連携拠点病院の相談支援業務の整備指針の対応状況と院内外の支援に関する研究. 第 61 回学会学術集会 (横浜). 2023. 10. (横浜)

東 尚弘 教育講演「対話型 AI とがん相談」第 12 回 日本がん相談研究会 (東京), 2024 年 3 月 2 日 (土).

吉田優子, 櫻井裕幸. がん相談支援センターの周知度向上への継続した取り組み. 第 61 回日本癌治療学会学術集会 (横浜). 第 61 回学会学術集会. 2023. 10.

北川 喜子. 高齢がん患者の治療と暮らしを支える取り組み～多職種チームにおけるリンクナースの実践と今後の課題～. 第 38 回日本がん看護学会学術集会 (神戸), 2024/2/24-25

## H. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む。)

### 1. 特許取得

該当なし

### 2. 実用新案登録

該当なし

### 3. その他

研修会: 福岡県がん診療連携拠点病院 福岡県がん専門相談員研修

「相談対応の QA (Quality Assurance) を学ぶ」第 10 回 九州・沖縄ブロック 地域相談支援フォーラム in 福岡